

最近あるセミナーで当社の ESG 調査・評価についてお話しする機会がありました。このセミナーは、タイトルに ESG とうたっていたせいか、予想をはるかに越える応募があり、会場のホテルでは立見も出るほどの盛況でした。

当社に来社する、調査対象企業のお話を聞くと、いろいろ ESG に関するセミナーがあって申し込んでも、なかなか席がとれない状況だそうです。

そのために当社のような評価会社に直接面談を申し込み、自分達の取り組みに対するアドバイスを求めたとのことでした。

当社が ESG 調査をスタートした 20 年前と比べれば隔世の感があります。この 20 年の、調査の現場で蓄積された知見やエビデンス、アナリストの暗黙知や身体知の総合が、最終的な当社の ESG 評価になることを考えると、ESG 投資はそれほど簡単なものではありません。

あたかも ESG と唱えれば、ESG 経営ができており、ESG 投資が可能になるかのような言説には違和感があります。

さらにここに来て、SDGs が出てきました。これは 2019 年に大阪で G20 の会議が開かれることの露払いとして政府やメディアが唱えていると当社では認識しています。トップが SDGs バッジをつけ、ESG 投資を声高に唱える、ある金融会社の実務担当者にインタビューをしたことがあります。トップのこの言動に対する冷やかな反応、また組織としてのコミットメントを、現場の活動にどう落とし込むかについての、具体的なアクションプランの欠如など、むしろトップの意向を骨抜きにしようとしているのではないかと、この印象を受けました。このようなトップと現場との意識の乖離はコーポレートガバナンスのリスクの最初の兆候と言えます。この訪問のあと念のためこの会社の株価の推移も見っていますが、ずっと低位安定というところではあります。

このような時、当社では過去の事例をチェックします。

同業他社、海外の競争相手、先進的な企業の事例などを集め、比較検討しながら、小さな兆候が大きな問題に発展した事例のパターンを見つけ出し、この金融会社の今後の動きにこのパターンがあてはまるかどうかを長期的に観察します。

SDGs や ESG は美しい概念であり、誰も反対することはできません。だからこそ、この概念にふさわしい内実をそなえているかどうかを評価する立場には、大きな責任が伴います。

バブルの様相を呈してきた ESG 投資ですが、20 年前と比べて、これほどたくさんの人達が ESG という概念に賛同し、社会的に受け入れられた証左であると見ることもできます。

今後は ESG が経営効率を高め、企業価値を増大させ、投資パフォーマンスに寄与するということを、明快なエビデンスとして出せるような調査・評価が求められるのではないのでしょうか。